

## 防災における共助の心理

防災は、よく自助、共助、公助が結合することが大事で、それぞれに役割があるということが言われています。自助は可能な限り、自分や家族を含めてできるだけ備えをしていくことで、備蓄や避難方法、連絡網などが主で、共助では地域、職場内を対象にして助け合いということになると思います。自助は比較的思いつきやすいし、あまり面倒なことではないような気がします。共助には、ヒトやモノの資源の確保に加えてコミュニケーションとかコミュニティ意識といったところでの多様な気遣いが必要になります。これまでも様々な取り組みがなされてきましたが、その中で課題も出てきています。一言でいえば、どこまで共助力が醸成されているのか、発災時に行動ができるのかなどと、時間とともに関心が減ってきていないか、特定の人だけの活動になってきていないかなどです。

同じ質や量を継続していくということは、この防災に限らず大変難しいところです。

2011年東日本大震災やその後の豪雨災害などを経験して、感じたことがあります。自助や共助の大切さを強く再認識したことと、特に共助の点で感じたのは、共助は自助があって初めてうまく作動するものであるということです。つまり、身の回りをしっかりとガードしたうえで、共助を構築しないと、時間とともに減衰していつか、何かあればきっと誰かが助けてくれるという依頼心が強くなって社会的な手抜きが見え始めるように思われます。過日、ある中学校の総合学習の中で、実際に自分たちの足で防災マップを作るということで、外での観察、発見をするというフィールドワークをして、それを地図に記入して、様々な視点から話し合いをして、自分たちの成果を小学校の高学年にプレゼンするという学習がありました。これは数人のグループごとに作業を進めるわけですが、人数が少ないグループほど、真剣に取り組んでいきますし、まして発表者は緊張もしますし可能な限り、仲間からの情報に集中します。一方、人数の多いグループは、ある意味で責任が分散して、誰かがやってくれるであろうと考えていました。おそらく、重いものをみんなで運ぶ時のような、全力を出さなくてもと思うような、我々も経験するところの社会的な手抜きであろうと思いました。

実は、共助を考えていくときにも、このような効果が出てくるような気がして、同時にみんなが同じ力を発揮させるにはどうすべきなのか、分担を決めて責任を押し付けるということでは不可能です。大事なことは、地域に関しての基礎力を共有することではないかと思えます。つまり、地域にどのような災害リスクが潜在していて、それが顕在化すると何が、どう変わるのかということを理解することで、地域であれば、大人だけでなく、子供たちが学校教育の中で継続して学習することが大事だと思います。そうすることで、自然災害への関心も高くなり、他地域での災害発生にも興味を持って、自分たちの地域に投影して考えることができるようになると思います。我々の心は、少なからず環境に影響されますので、役に立つ、実践的なものにするには、急がば回れ式で、基礎知識を地域で共有していけば、実践的な、一人一人が本気で力を出せる状況が構築できると思います。